

SPORT FOR TOMORROW シンポジウム 2022 開催報告

1. 概要

2014年にスタートしたSport for Tomorrow（以下、SFT）の締めくくりとして、第1部ではSFTの7年間の軌跡について総括し、第2部のパネルディスカッションでは「SFTのレガシーとこれからのスポーツ国際協力・交流」をテーマにSFTを振り返り、今後の課題など議論した。海外関係者、プログラム参加者からのビデオメッセージを通してSFTが現地にもたらしたインパクトについても振り返り、SFTレガシーの継承、今後のポストSFTに繋げるシンポジウムとした。

2. 日時

2022年1月26日（水）16:00～18:35

3. 形式

ハイブリッド型（会場＋オンライン）

- ・ 会場：JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE 岸清一メモリアルルーム
- ・ オンライン：Zoom ウェビナー

4. 参加者

合計： 228名

- ・ 会場参加者 25名（登壇者9名、登壇者団体関係者11名、運営5名）
- ・ Zoom参加者 203名（受賞団体2名、登壇者1名、メディア5名、参加者195名）

5. プログラム

第1部：SFTC 全体会議

スケジュール	内容
16:00～16:05	SFT シンポジウム開会挨拶（スポーツ庁長官）
16:05～16:15	2014年からの総括（スポーツ庁審議官）
16:15～16:40	スポーツ庁長官感謝状授与式（スポーツ庁長官） 「7年間で最多の認定事業を行った団体」株式会社サニックス
16:40～16:45	ビデオメッセージ（国際オリンピック委員会・国際パラリンピック委員会）

第2部：SFT シンポジウム

16:50～17:40	パネルディスカッション① ～のSFT振り返り～ モデレーター：伊藤雅充氏（日本体育大学） パネリスト： 有森裕子氏（ハート・オブ・ゴールド） 伊藤政則氏（TAIYO 株式会社） 河合純一氏（日本パラリンピック委員会） 向山昌利氏（日本ラグビーフットボール協会） 山口拓氏（筑波大学）
17:40～17:55	海外からのビデオメッセージ（SFT プログラム参加者より）
17:55～18:25	パネルディスカッション② ～スポーツを通じた国際協力・交流をより推進していくために～
18:25～18:30	ポスト SFT について（スポーツ庁国際課長）
18:30～18:35	閉会挨拶（外務省人物交流室長）

6. 各プログラム要旨

第1部：SFTC 全体会議

開会挨拶

- ・ SFT はスポーツを通じた国際協力交流に関する官民連携のネットワークを構築・発展させてきた。スポーツは立場を超えた相互理解や様々な障壁を乗り越える力があり、人生に活力や感動を与えてくれる。
- ・ SFT の裨益者は 2021 年 9 月末までに 204 の国と地域で 1300 万人以上となった。
- ・ COVID-19 の世界的拡大により国境を越える移動が制限された結果、SFT 事業の多くが実施困難となったが、オンラインに切り替えながら事業を継続してきた。
- ・ 7 年間の取組みにより培ったノウハウやネットワークを活用し、ポスト SFT として世界を繋ぐムーブメントを東京 2020 大会のレガシーとして継承したい。

2014 年からの総括

- ・ SFT の会員数・裨益者数の推移に関して、この 7 年間で SFT コンソーシアムは成長し、賛同する会員団体は約 9 倍に増加（53 団体から 459 団体）した。会員間の連携も進み、国際協力・交流のみならず国内事業での連携も見られた。コンソーシアムが 1 つのレガシーである。
- ・ 裨益者数は 2019 年 9 月末には目標を達成し、事業内容も多岐に渡った。
- ・ COVID-19 の世界的拡大による東京 2020 大会の延期に伴い SFT も 1 年延長となった。事業形態のオンラインへの切り替えにより交流が容易になる等、ポジティブな側面も見られた。
- ・ スポーツ庁の取組みには「パラリンピック参加国・地域拡大支援」があり、東京 2020 パラ大会での参加国拡大を目標として約 40 のパラ未出場国を中心とする各国 NPC に対し、IPC・IF・JPC と連携しつつ 4 年半に渡る支援を実施した。結果、東京 2020 大会に参加予定の NPC は過去最多の 174 が見込まれた。実際には COVID-19 の影響により 162 となり、ロンドン 2012 大会の 164 には及ばなかったが前回のリオ大会を上回った。
- ・ スポーツ庁では「スポーツを通じた新型コロナウイルス感染症対策支援」として、日本のスポーツ分野の COVID-19 対策の知見を活かし、感染症対策の整備を支援する事業を実施した。
- ・ SFT には次の 3 つの大きな成果がある。①世界との関係性の構築強化と日本が得た信頼 ②コンソーシアムというネットワークの構築と連携・協働 ③SDGs への貢献
- ・ 第 2 期スポーツ基本計画の指針の一つである「スポーツで世界とつながる」に関しては、SFT を通じた貢献が大きい。
- ・ 第 3 期スポーツ基本計画（本年 4 月施行）の策定に当たり、ポスト SFT を推進するため、現在のコンソーシアムの活用や日本の強みを活かしたリーディング事業について検討中。

スポーツ庁長官感謝状授与式（受賞団体：株式会社サニックス）

- ・ 受賞理由として 2019 年までに 5 競技で 25 回に渡る大会を実施し、参加国数は 32 カ国・地域、裨益者総数が 3,038 名となったことが挙げられた。

○ 株式会社サニックス代表取締役社長 宗政 寛氏

- ・ 2000 年より実施しているサニックス・ワールドラグビーユース交流大会は、コンソーシアムへの加盟後に認定事業の申請を行い、現在も継続している。累計参加者は 13,000 人を超え、ラグビーワールドカップ 2019 日本大会にも交流大会の経験者が 26 名出場した。
- ・ 今後も当社の社会貢献事業に 3 つの理念である「青少年のスポーツを通じた健全育成」「競技力の向上」「国際文化交流」を目的として社会貢献活動を推進する。

- ・ 全ての大会は、福岡県宗像市の多目的スポーツ文化総合宿泊施設「グローバルアリーナ」で実施し、大会期間中は施設に宿泊し、共同生活をする中で競技を超えた経験ができる。

○ 株式会社サニックススポーツ・文化振興事業部 渡邊 敏行氏

- ・ 「サニックスワールドラグビース交流大会」の他、サッカー、ハンドボール、柔道、新体操などの大会を実施。今後も地球規模の課題を視野に接点創出の機会を創っていく。

ビデオメッセージ

○ 国際オリンピック委員会 (IOC) トーマス・バッハ会長

東京オリンピックは希望・平和・連帯の歴史的な大会となった。世界 205 개국・地域の NOC そしてオリンピック難民チームが「より早く、より高く、より強く、できるためには団結し、連帯する必要がある」というメッセージを東京から世界に送った。過去 7 年間、スポーツの力を強調し、SFT を通じて世界中で数千の取り組みを実施し、多くの人々の人生を変えることができ、より良い世界の実現のためにスポーツの力を役立てたことと言える。

○ 国際パラリンピック委員会 (IPC) アンドリュー・パーソンズ会長

日本の皆さんと共に本シンポジウムに参加できること、また日本の方々のスポーツを通じた世界への様々な貢献を嬉しく思う。私も SFT を活動当初より見てきたが、非常に素晴らしいと思う。SFT は多くの人々の人生を変えてきた。また多くの地域で多様な社会課題が解決したことを心から感謝したい。SFT に携わられた皆さんに感謝している。

第 2 部：SFT シンポジウム

パネルディスカッション① ～SFT の振り返り～

パネリスト SFT 関連事業紹介

○ TAIYO 株式会社代表取締役社長 伊藤政則氏

- ・ 2016 年よりナイジェリアの成績優秀者への奨学金プログラムを始め、若手アスリートの日本への留学支援を行なっている。2018 年には当時の最大裨益者数となりスポーツ庁長官感謝状を受賞。2019 年にはナイジェリア NOC と公式パートナー契約を締結。

○ NPO 法人 ハート・オブ・ゴールド代表理事 有森裕子氏

- ・ 1998 年にカンボジアでの活動を中心に設立し、開発途上国や被災地での人材育成、教育支援をスポーツを通して実施。障がい者を対象に含めた「アンコールワット国際ハーフマラソン」や、青少年・指導者育成を掲げたスポーツ祭の開催、体育科教育支援事業を実施してきた。

○ 日本ラグビーフットボール協会普及育成委員会国際協力部門 部門長 向山昌利氏

- ・ 2011 年より「アジアンスクラムプロジェクト」という事業を実施してきた。Engage Asia を掲げ、アジア地域のラグビー普及・ラグビーを通じた社会開発を目的に、20 カ国に約 170 名の関係者を派遣した。

○ 日本パラリンピック委員会委員長 河合純一氏

- ・ 日本のパラリンピックムーブメントを推進する組織として各国 NPC と連携している。アギトス財団とも情報交換しながら事業を実施。用具提供だけではなく運営ノウハウや教育を含めて取組んでいる。

○ 筑波大学体育系助教 山口拓氏

- ・ 筑波大学スポーツ国際開発学専攻の助教として勤務。2012 年頃の SFT 構想期より関わりを持ち、国際スポーツアカデミーも担当している。SFT の開始が国際的に周知された際、「Big Giant が動き出した」との評価を海外から得ていたことを記憶している。

トピック 1：SFT の独自性について

- ・ （向山氏）1 つ目に大規模国際スポーツイベントとの連携について、東京 2020 大会、ラグビーワールドカップ 2019 と連携し、アジアンスクラムプロジェクトを推進した。2 つの大規模イベントとの連携を通じて、通常では得られない資源の活用、効果ある事業を実施できた。2 つ目に多様な組織連携が促進された。JSC や JICA と連携し資源を補完し合うことで、参加者数の増加だけでなくプログラムの質の向上にもつながった。3 つ目に、スポーツを通じた社会課題の解決の重要性の認識について、NF を評価する指標が競技力や競技人口だけではなく、社会課題解決への貢献にもあることを認識できた。
- ・ （河合氏）1 つ目に多様な組織と協働した効果的で持続可能な活動について、JPC では東京 2020 大会に向けて当初、各国 NPC との活動を検討していたが、アジア地域での女性選手の活躍機会が少なさという共通課題を鑑み、IPC・APC・JSC と連携しながら事業を進めた。2 つ目に世界の子どもたちにパラリンピック教育の価値を伝えたことである。教材「I'mPOSSIBLE」を日本国内だけでなく、シンガポールやザンビアに教員研修という形式で提供してきた。行動変容を促すプログラムを世界に広げていたことは独自性の一つである。
- ・ （伊藤政則氏）世界とのネットワーク構築に重点を置いて取り組んできたが、スポーツ庁審議官からもその旨を SFT の成果として述べられており、良かった。
- ・ （有森氏）社会との連携を念頭に様々な活動を実施してきたが、各団体とも目指すのは共通であることを感じた。
- ・ （伊藤雅充氏）それぞれが実施する事業は異なるが、土台は共通の想いや価値観であると感じた。ただサービスを提供するだけでなく自分たちも共に学び成長するという姿勢が独自性であると認識した。

トピック 2：SFT 事業の好事例について

- ・ （有森氏）カンボジアの人々を元気に、健康を目指す上で土台は「教育」と考えている。1 つ目は 5 年に渡る活動継続により現地の人々の認識がより重要性を帯びたものになり、その中でスポーツを教育に組み込む流れを一緒に作ることができたことである。2 つ目に小中高校での体育科教育支援を JICA と協力しながら草の根技術協力事業として実施したことである。小学校体育科教育の教材、学習指導要領、指導書を作成した。一貫した人材育成の必要性を感じる中、SFT の支援により中学校の学習指導要領の作成・支援を実施できた。高校に関しては現地の人々が主体となり協働して指導要領を作成した。現地の人材と丁寧に時間を共有し、価値観を尊重しながら事業を継続することが重要と考える。
- ・ （伊藤政則氏）成績優秀者への奨学金プログラムとナイジェリアの留学生支援、スポーツ用具寄贈の仕組みを作成している。女性の外出が好まれないナイジェリア北部での女性のためのサッカー大会は開催に至る過程は困難であったが、実際には約 1000 人の聴衆が集まり、結果として「もう一度やりたい」という声が多く女性から挙がった。

トピック 3：レガシーとして何を残していくか

- ・ （向山氏）日本ラグビーフットボール協会は「アジアンスクラムプロジェクト」をラグビーワールドカップ以降も継続したく今後も SFT を活用したい。関係者の知見、特に SFT コン

ソーシアムのネットワークを残しながら、さらにスポーツ以外の業界の方との交流や議論の機会を設ける必要があると考える。SFT を通じて蓄積された膨大な経験を残し、その記録を批判的に検討し、事業の改善を図ることが重要となる。

- ・（有森氏）SFT の知見を共有する場を継続できるが大切である。携わられた方々の想い自体がレガシーである。
- ・（伊藤雅充氏）「Sport for Tomorrow」に Tomorrow という語が入っている時点で、永続性のあるように思う。当事者の成長や生き方への影響等がレガシーとして刻み込まれたのではない。それを発展し続けていくことが重要と考える。

海外からのメッセージ

- JADA 国際セミナー（イエメン・アンチ・ドーピング委員会委員長：アジズ カレド氏）
 - ・ スポーツの価値は当委員会が実施する若者の心理社会的事業に大きな影響を与えており、その普及は内戦によって影響を受けた子どもの為でもあり、変革の担い手を育成している。
 - ・ PLAY TRUE 2020 や JADA セミナーへの参加は、アンチ・ドーピング活動の助けとなるものであり、東京 2020 オリンピック・パラリンピックの参加につながった。JADA がメンターであることを嬉しく思う。今後も多くのレガシーを創り出し、他国にも影響を与えたい。
- 卓球チームへの競技環境支援（モンゴル自閉症協会顧問：アルタ L 氏）
 - ・ モンゴルでは、2010 年頃に Special Olympics Mongolia を設立し活動を実施してきた。
 - ・ 日本卓球協会との連携により SFT コンソーシアムを紹介頂き、手厚い支援を頂いた。
 - ・ 結果、2015 年のスペシャルオリンピックス夏季世界大会・ロサンゼルスに出場し、金銀銅各メダルを 1 つ獲得した。特別学校に贈られた卓球台は継続的に利用されており感謝している。
- パラ陸上プログラム（カンボジア パラ陸上：ヴァン・ヴォン選手）
 - ・ 2017 年に近藤先生と三井先生のワークショップに参加させて頂いた。私たち 5 人は教わったトレーニングを継続し技術を向上させ、東京パラリンピックに出場できた。
 - ・ 2023 年にはカンボジアで東南アジアパラ競技大会が開催される予定であり、メダル獲得を目指して技術を更に改善させたく、先生に再び指導頂きたい。
- つくば国際スポーツアカデミー(TIAS)（ボツワナ 第 7 回 IWG 事務局長：ハミ モチビ氏）
 - ・ TIAS 5 期生として修士課程の 2 年間、開発のためのスポーツを専攻した。
 - ・ 東京 2020 期間中はオリンピック・ブロードキャスティング・サービスの一員として霞が関のゴルフ会場の設営アシスタントとして働く機会を得、貴重な経験となった。
 - ・ TIAS で習得した知識をもとに、現在ボツワナで様々な事業を実施している。現在はスポーツマネジメント会社を設立し、女性スポーツの指導者向けに講座を提供している。またスポーツトラストを同設立し、ソーシャルインパクトをもたらすプログラムを提供している。直近では脆弱な立場にある子どもの為のイベントを開催し、用具提供や施設の建設を行なった。

パネルディスカッション② ～スポーツを通じた国際協力・交流をより推進していくために～ 今後の課題

- ・（伊藤政則氏）どのように現地との交流を継続するのか、或いはどのように現地の土地勘を得るかが重要な課題である。部族単位や個人単位など様々な相違がある中で、どこをターゲットにスポーツ交流をしていくかを言語だけではなく、感覚的なコミュニケーションを取り

合いながら継続すること、またオーナーシップを尊重しながら、現地の人々の内発的な発展をいかに引き出すかが重要である。SFTC 会員団体を核とした「アフリカ SDGs」というコンソーシアムを立ち上げようと考えており、会員団体同士のつながりを活かした更なる発展が求められる。

- ・（山口氏）例えば人材育成に関して、1つの組織では事業の継続性は担保しにくいいため、協働で実施する必要がある。育成した人材が現場で活動できる状況を生み出す必要がある。是非、会員組織にも、人材育成・組織改変・ネットワーキングの3点をご検討いただきたい。また、海外での成功事例の国内還元や SDGs への還元に関してコンソーシアムを活用しながら、発展することが求められる。
- ・（伊藤雅充氏）人材育成とその活用に関する戦略の必要性を痛感した。国際的な取組みを国内で発展させる循環という主旨に関して、考えがあれば伺いたい。
- ・（河合氏）東京 2020 大会では、オリンピック参加国・地域は 200 を超えているが、パラリンピックは 162 でありギャップがあった。SFT ではこのような課題に連携して取り組んだ。今後は、各組織それぞれが成長しながら連携を発展させるという意識を持つことが重要だと思われる。
- ・（向山氏）実施した活動をいま一度振り返る必要があると思う。ジェンダー平等や障がい者の参加促進についてラグビーを通じた事業に取り組み、当時は相手方も当方にも有益と思えたが、重要なことは今後 2〜3 年間の変化をフォローアップすることである。JRFU も来年度から日本スポーツ振興センターや国際開発系のコンサル企業と連携を図りながら、評価を実施する予定である。
- ・（伊藤雅充氏）評価の観点、特に想いのような内面的な変化をどのように測定するかが今後の課題といえる。
- ・（有森氏）SFT 事業では、オリパラ双方を対象として事業を進めていたが、パラリンピックに関しては障がい者が十分に活躍できる環境は整備されていない。今後の SFT は全ての人々を取り込める事業展開が求められる。そういった点も含めて、実施事業の 2〜3 年後の変化、またオーナーシップの観点は大切である。
- ・（伊藤雅充氏）JPC と協力して、パラリンピック出場国を増やす取組みを行ってきたが、支援側による方向性の強制ではなく、現地側のオーナーシップを尊重する形で事業を進めた。過干渉に配慮し、相手側がどうありたいのかを考えた関係の重要性が必要と感じている。
- ・（山口氏）文化の違いを乗り越えることは難しい。変化を起こすのは部外者ではなく当時者であるが、そこに適切な情報提供があるか否かで大きな差が生まれる。評価は重要であるが、何を持って成功とするのかについては、現地の方々が決めることであり、計画の策定段階から、共同で検討する必要がある。
- ・（伊藤雅充氏）事業評価の観点から、どのように事業を進めるのが望ましいか、向山氏にお伺いしたい。
- ・（向山氏）相手側にニーズが本当にあるのかどうかを理解する必要がある。相手国の協会がラグビーを強くしたいのはよく分かるが、社会的課題の解決に繋がっているのかは不明であることが多い。そのため現地の問題や知識を得ることが重要となる。アイデアとして JICA ボランティアのラグビー隊員との連携が考えられる。彼らと連携することで、現地の課題を理解することができ、事業効果や持続性も上げられるのではないかと。

人材を増やすための方策

- ・（伊藤雅充氏）人材の重要性について取り上げられたが、新しい人材を増やす方策等について意見を伺いたい。
- ・（河合氏）自身が事業を楽しんで行うことが重要で、現地の方々と一緒に楽しく行っていることを示すことが必要である。常にオープンマインドを持っておくこと、自身が変化し続けることを伝え続けることが何よりも大切だと思われる。
- ・（山口氏）「ミッション・パッション・ドリーム」という言葉があるが、自身がドリームを持って、楽しく、信念を持つことが非常に重要とあらためて感じた。共に育つ・歩むという点で、現地側の代表者を探し出すことも重要であると感じた。

財源の確保

- ・（有森氏）人材が必要であることは明確であるが、財源が関係してくる。良い事業も財源がなければ継続は難しい。そうした観点で意見をお聞かせ頂きたい。
- ・（伊藤政則氏）当方がナイジェリアで実施するナマズ養殖では、収益の一部を社会貢献活動や更なるナマズ養殖の施設投資に当てたり、人材からの受けた投資で更に事業を発展させている。こうした循環型の形態を日系企業に示すことで賛同企業も増えている。
- ・（伊藤雅充氏）関係者間で協力しながら価値を創出すること、新しいチャレンジを含めて楽しみながら事業を行っていくことが重要である。

チャットへの質問

- ・ 質問：SFT では様々な事業が行われており、その裏側にどのような外交的努力があったのか。
→SFT では多くのプログラムが行われているが、大使館が実施している事業もある。但し、多くのコンソーシアムの事業は、国と国というより、むしろ現地の組織と日本の組織、当事者と支援者というように草の根でつながる活動が中心である。（山口氏）

ポスト SFT について

- ・ SFT はスポーツ関連団体、産学官、NPO 等と幅広いカテゴリーの団体が関わり、さらに 450 団体を超える団体が参画するという点でユニークであった。SFT 事業で生まれたネットワークはレガシーであり、ポスト SFT 推進事業でも、その深化を目指して継続する。ポスト SFT の活動目標としては、SFT ムーブメントの拡大を念頭に、世界中で 700 万人の裨益を目標に国内還元も視野に取組む。活動には 3 つの柱がある。
- ・ 1 つ目は、SFT コンソーシアム（ネットワーク）の継続。人材ネットワークは SFT の大きなレガシーであり、これを継続・発展するような取組みを行う。事務局機能の継続、会員カンファレンス、一般/会員向け専用サイトを継続・発展させる。
- ・ 2 つ目は、日本の強みを生かしたリーディング事業の実施。これまでの取組みに加えて、新たな地平を開く事業を進める。パートナーシップ推進事業（NF 連携、JOC/JPC、自治体等の新しい分野、マッチングで進める連携等）や、スポーツを通じたジェンダー平等の推進や多文化共生社会の実現に関する事業（東京 2020 大会での取組みの更なる発展）、オリパラレガシー国内還元事業（スポーツアカデミー人材の活用、ホストタウン活動の活用等）がある。
- ・ 3 つ目は、会員活動を推進するための取組み。コンソーシアム会員の見直し（再募集）、認定事業の仕組みの継続、裨益者数のカウント（日本人も含めた数）の再検討、会員間・異業種間の更なる連携促進、ウェブサイトの充実、スポーツ振興くじ助成(toto)活用がある。

- ・ 今後 4 月以降にポスト SFT 運営事務局の体制が整った段階で、会員募集の周知予定である。

閉会挨拶

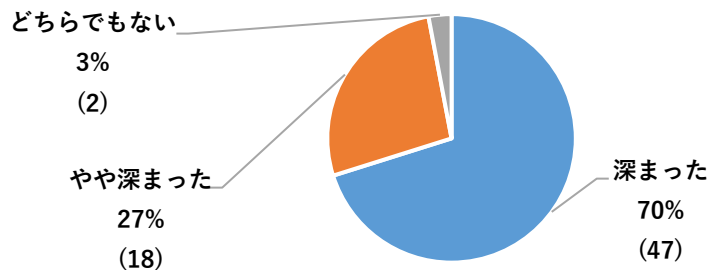
- ・ SFT のこれまでの軌跡を皆様と辿ることができ、官民間わず多くの方々と同じ目標をもとに活動できたことを実感している。
- ・ Sport for Tomorrow は 2014 年にスタートし、当初掲げた 100 か国・地域 1,000 万人以上という目標は予定よりも 1 年早く 2019 年に達成。2021 年 9 月末時点には、204 か国・地域で 1,300 万人以上に達した。SFTC の会員団体数も 459 団体にもものぼる。この SFT という取組にご賛同いただき、献身的に取組み、お力添えをいただいた皆さまには心より感謝。
- ・ 新型コロナウイルスの影響により、東京オリンピック・パラリンピック競技大会も 1 年延期となり、SFT も国際的な人の往来、イベントの制限など、非常に困難な場面が多々あったが、会員の皆様はオンラインにより様々な工夫・活動を実施された。外務省としても、“スポーツ外交”の推進に向け関係団体から提供された機材の輸送を支援した。
- ・ SFT は一つの区切りを迎えるが、今後とも皆さまとともに築き上げたレガシーを活かして、スポーツを通じた国際協力・交際交流をさらに推進したい。SFT を通じて再認識したスポーツの力・価値をこの先 10 年 20 年も伝えていけるよう、引き続き皆さまのお力添えをお願いしたい。

7. アンケート結果（回答数 67）

SFT への理解について

シンポジウムを通じてSFTについての理解が深まりましたか？

(N=67)



SFT は裨益国・裨益者にどのようなインパクトをもたらしたと感じましたか。

- ・ スポーツを通じて新たなチャレンジや意識づくりの環境や機会を提供したこと。_____
- ・ 単純な一方通行の助成事業ではなく、根本からの改革に取り組んでいると感じた。当事者の変わりたい、より良くなりたいという気持ちを自ら自覚させ自ら取り組ませるといった教育の根本原理を実践していること。
- ・ 現地側のオーナーシップを尊重することで活動の自走化が多く見られたこと。一方で、活動における支援側による価値の押し付けには反省も必要。
- ・ 様々な機関との連携により、ジェンダー等を含めた社会課題の解決への貢献を目指している。
- ・ 各地域の課題を一緒に解決しながら、共に成長し信頼できる関係を築いたこと。
- ・ スポーツを軸としたネットワークを築き、“パッション”や“ドリーム”を生み出したこと。

- ・ 国内外での「人材」育成や関係者間のネットワーク構築が SFT がもたらしたインパクトであり、「レガシー」であると思う。一方で裨益国の社会変革という点については量的・質的研究を通じた継続的な評価が必要と考える。
- ・ 国内外のスポーツ以外の分野の方々とも連携し、スポーツの価値を共有したこと。
- ・ スポーツを超えて、文化・教育・経済等様々な分野で国を超えて繋がりを持てたこと。
- ・ コンソーシアムという横との繋がりにより支援者と裨益者双方に相乗効果をもたらしたこと。
- ・ スポーツや体育科教育の重要性を裨益国に伝え、支援国側の再認識にも繋がった。このような点が人々の意識や行動の変革に重要で、スポーツを通じた国際開発の重要な要素と感じた。
- ・ SFT の後押しがあるからこそ、現地でのスポーツ国際開発事業が促進された。
- ・ 志を持った関係者間での意見交換や実現までの道程はスムーズであり、裨益者に日本の組織力もアピールできたのではないかと。国内でも国際交流へのスポーツの重要性を伝えている。
- ・ 世界への幅広い活動を通して、これまで日本として貢献できていなかった地域や分野での新たな国際交流の形を残すことができたことを知った。
- ・ 東京 2020 大会のためではなく、明日に繋がる道筋を裨益国・裨益者へ創ったこと。
- ・ 東京 2020 大会前の日本国内でのトレーニング（キャンプ含め）を実施でき、参加した選手、NOC、NPC は、このプログラムと関係者にとっても感謝している。
- ・ 多くの国の子ども達・関係者にスポーツの楽しさや重要性を伝えたと感じる。また、協調性などスポーツを通じて成長できる機会を提供できたのではないかとと思う。
- ・ 相手国・地域で通常行われているスポーツ活動とは異なるかたちでの参画機会の提供。
- ・ The impact is high on a personal-professional growth and towards remaking an effective working culture in their immediate working communities. The Japanese networks made by a person from a developing world is far more important for their long-term strategic development. SFT brings the sustainable EDUCATIONAL relationships and means for growth for its' beneficiary parties.
- ・ Huge impact specially building capacity
- ・ Change of life for vulnerable children, using sport as a tool for social impact.

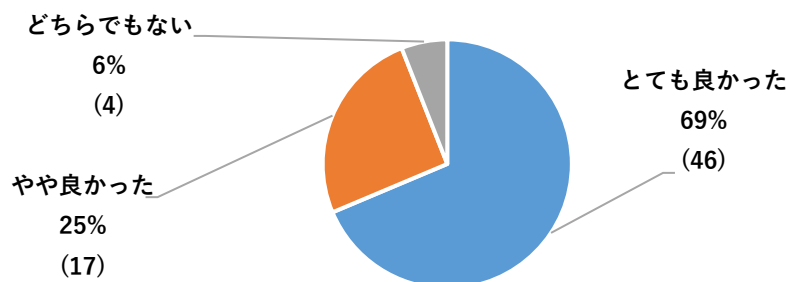
ポスト SFT へのお考えがあれば教えてください。

- ・ 取組みの継続には関係団体の連携継続・情報交換の活性化が重要。
- ・ 様々な業界の参加は重要なポイント。スポーツ界の中だけで話をするのはもったいない。
- ・ 国民全体への広報と認知度を拡大、長期的な海外との連携の仕組みを構築できると興味深い。
- ・ 今後もコンソーシアムを中心に取り纏めを実施し、SFT の枠組みが無くなった後は、関係団体の持ち回りで対応を行うことができると考える。
- ・ ポスト SFT ではコンソーシアム事務局が普及事業を希望する競技団体と支援を希望する企業・財団等をマッチングする役割を能動的に果たせると効果が高いのではないかと。
- ・ 競技種目を超えた事業。例：ラグビー x サッカー・ホッケー（屋外グラウンドの共通点）。
- ・ 国内でのオリパラ教育、学校教育での SFT の啓蒙の継続も含めてほしい。
- ・ 各国 NOC、NPC を通じた現地側のニーズの把握やプログラム実施を進めていけると良い。
- ・ 今後の人材育成のためにも大学連携を含めた取り組みを希望する。

- ・ 病床者のリハビリと復帰のためのスポーツ支援を希望する。いじめや不登校の子ども、難民など脆弱な環境にある対象のためのスポーツ支援を期待したい。
- ・ 海外事例の国内還元や国内の在住外国人との共生推進への寄与を期待する。
- ・ ネットワークを活かした新しいプロジェクトを開拓できると良い。
- ・ これまで実施してきたプロジェクトのフォローアップを継続して行われることを願う。
- ・ より体系的なアプローチの確立、評価が必要。社会学的な研究アプローチの活用が望まれる。
- ・ 日本の地方の政策担当者が相手国での活動に参加するような取組みに期待したい。
- ・ モニタリング指標を確立すべき。裨益者数も男女、子ども、障がい者等の内訳を示すべき。
- ・ プログラムの自走化を目指すこと自体は良いが、急な助成金削減はプログラムの質・量の低下を招く。SFTの「レガシー」を残すのであれば、今後もう少し増額すべきではないか。
- ・ I would like to see Post-SFT programs as a role-model programs to the entire world by promoting world peace through highlighting a "SFT culture" underpinned by the Japanese way of development. I wish Post-SFT would continue to demonstrate its unique characteristics of "humanity, harmony, and hospitality".
- ・ Continue offering programmes for social impact such as leadership trainings or institutions.
- ・ More collaborative projects along with different NGOs who use sports as a tool in other countries and use sports as a development tool in ODA and Japan's foreign policy initiatives.
- ・ How do these SFT initiatives continue in those 204+ countries?

運営面について

シンポジウムの運営面（オンライン・会場での対応等）
はいかがでしたか？(N=67)



運営面での改善点があれば教えてください。

- ・ 限られた時間で伝えなければいけない情報が多いので仕方がないと思うが、参加者との繋がりが、特に質疑応答がもう少しあると良かった。
- ・ 海外からのメッセージ動画がもっとあると事業の効果を更に実感できたと思う。
- ・ パネリストやMCの男女比率を平等にして欲しかった。
- ・ SFTのホームページに新たに掲載される事業のリンクを紹介したメルマガを定期的にもらえるとありがたい（本シンポジウムで紹介された事例をこれまで知る機会がなかった）。
- ・ 多くのオンラインイベントで同様に言えることだが、皆が早口で慌ただしく、全体的に詰め込みすぎている印象を受けた。

- I think a Q&A forum would have been nice to conclude the symposium, but it had already exceeded the time limit.

8. ウェビナー写真

室伏スポーツ庁長官 開会挨拶	星野スポーツ庁審議官 プレゼンテーション
長官感謝状授与式（株式会社サニックス）	ビデオメッセージ（IOC 会長・IPC 会長）
パネルディスカッション	
海外からのビデオメッセージ（SFT プログラム参加者）	
新井スポーツ庁国際課長	渡邊外務省人物交流室長